4230

能登屋敷（たんやしき）

履歴写真（おもかげ）

高橋一夢編輯

明治三十一年十一月新版

八
2
104

№ 6660

特64 98

序

旦ふの紅顔存も夕べ
あがらし居ら
泉然へ旅立ざ
三を初れ
や或ハ
し趣白の州き
人面ま
中婦の放郎夜べるハ
も人方の
のハ

紙てまとバ立れ居
ら買極さし此ふどさ夕
受ふ樂其御書を無しの
をて座名鼎ハ常と白
外見ハも貧も皆の人骨
へバて共との免風も
ハやのまてせれま身經
遣と興高ら得誘も文
ら吾行助河れぬハ願の
じさのゲ原し命れハ中
とき其冥崎ハ數てぬま
ホま筋府國坂ふ黄も
ン御書の太東るふのり

明治二十年菊月

築島流士

沢村源之助ハ東京出生ニテ古人高助の弟子ニテ幼年の頃清十郎と云五歳ニシテ両親ヨ別賣姉ハ新富町ヨ寫眞師ヨて濱女の養育ヨて今をやまの閑へ高く名代の花形娘役ナリィヨ紀の國屋サン

沢村源之助

片岡我童

片岡我童の先祖片岡仁左衛門ハ元ハ山田流の(うたい)の師匠ナリ大阪の住ゐして常ゑ鼓を好ミ自分ゑ鼓の胴を作り片岡胴ト名附て元來能役者ありしも芝居のまきより身を落シ引續きさる今時ハ九代目家柄のむまり役ハ源三位頼政大石由良之助佐野源左衛門藤屋伊左衛門忠兵衛ゑ

ずハ　イヨ松嶋屋サン

沢村納子

沢村納子ハ出生尾張國名古屋本町ニテ
母ハ仝所の踊の師匠中村鶴枝の忰ナリ
幼名仙太郎ト云今中村芝翫仝地
ヨテ興行中ニ仝人の弟子と
ヨリ東京ヘ歸リ仙太郎ハ古
人高助の妻女の妹ニネ女ヨ
思ハれ高助の妻菊女の志願
ニテ中村芝翫ヨ相談の上沢
村家の養子とヨリ沢村納子と改ヨリ
イヨ　紀の國屋サン

守田勘弥

座元守田勘弥ハ河原崎権之助と両名の座元ゑり一年替りにて有しも今ハ守田一名とゑり同氏ハ高名の聞こゑゐりて外國にても其高名を知りて既ニ米國の公使某ハ同氏をまねぎ堀越氏同道にて酒宴有りしゑる程ゑり實ニ高名の守田氏にてゑりてゐれ

中村時藏

中村時藏ハ大阪出生
ヨて親ハ古人中村歌
右衛門の弟子ニテ中
村歌女ト云女形ヨり
其實子ニテ幼年の頃
ヨ別れ古人の市川市
藏の弟子トヨり今親
の名を相續しても
家名ハ同播磨屋サン

尾上菊五郎

尾上菊五郎ハ東京の出生ニテ先代菊五郎の二男ニ當り幼名牛之助ト呼シ美男ナリ事故アリて出家いさゝ谷中ニテ日蓮宗の寺延命院と聞さるハ此人ナリ又三代目菊五郎ハ化者の名代タル人ナリ今四代目ハ母方の家名ヲ續テ名人菊五郎の續子ナリ當時二番目世話事の大一人ナリ　イヨ音羽屋の大君

助高屋高助

高助ハ東京出生ゴして先祖を訥子と云其後を田之助と云三代目を沢村宗十郎と云後日後日又長十郎と云尾張名古屋本町ゴて死去ス仝人の實子ニテ幼年の頃沢村源平と云又訥升と改未高助とゐりて父の三十三年季ゐる故名古屋ゴ趣き仝地千歳座ゴ於て高野山の重氏左馬之助の乘切を興行中父の死去せし宿所ゴ於て昨十九年二月二日死去ス

中村芝翫

中村芝翫ハ大坂出生ニテ同所新町の遊女屋の忰ナリ幼年の頃古人中村歌右衛門同地行業の時養子ニシテ中村福助ト云シガ病氣の爲瑠縁とナリ其頃大坂新町の遊女屋中ニテ是ヲ引立歌右衛門へ渡りヲ付中村福助の名を其儘ニテ同氏の弟子分トナリ居ゑず登角師ト折合ぬ故江戸ニ來リテ興行も其後古人中村富十郎來りて福助を引立歌右衛門の俳名中村芝翫ト相改メ東京中の中村家踊の師匠の家元ナリ所作振事の一人 イヨ成駒屋サン

河原崎權十郎

河原崎權十郎ハ大阪出生ニテ古人嵐りのくの實子ニシテ東京ヘ登り同名ニテ猿若町一丁目中村座ヘ乘込行業中皆様御存知の夜嵐於絹一件ニテ悪きうさも有まゝさゞ其後今の九代目堀越サンの引立ニテ其名を改メ團州翁の弟子トありて河原崎の名儀を請次ぎ河原崎權十郎　イヨ川崎屋サン

沢村田之助

先祖三代目田之助以來相續無のりまゝの古人沢村長十郎の二男由二郎わ十九歳ニテ立をやまとなり沢村田之助の家を相續シテ女形の名人ありまゝの二十五歳ニテ難病ヲ煩ひ遂の爲右の足を切り左の手の指も落かさゝと成テモ三府ヲ行業致シ既ニ明治十三年七月東京ニテ死去ス仝人の弟子ニ沢村百之助ト云有新富座の茶屋紀の清の忰ナリ是を養子トシテ四代目沢村田之助ヲ相續スイヨ紀國屋サン

坂東家橘

坂東家橘ハ東京出生ニテ
稼若町二丁目の芝居市村
座主市村竹之丞の二男ナ
リ兄ハ尾上菊五郎の家を
相續シテ自分ハ市村家を
相續シ代々の立役あり
イヨ立花屋サン

中村壽三郎

中村壽三郎ハ大阪出生ニテ市川
左團次の實兄あり幼年の頃ハ中
村歌右衛門の弟子となりしも中年
ニて古市川小團次の弟子となり
市川米弥と云ふ元師
匠の名跡をあのり中村
壽三郎と改當時中嶋座
の座頭若松屋の大君あり

片岡市藏

片岡市藏ハ大坂出生ニテ
古人片岡仁左門の弟子ナ
リ先代片市の家名を其儘
ニ實悪兩様の立役ナリ
イヨ松島屋サン

市川金太郎

市川金太郎ハ東京出生
ヨテ父ハ芝居の振附今
の藤間勘左衛門の伜ホ
り當時九代目の弟子
ニテ大引立の若旦那
株此勢でハ後日ハ十
代目ニモホれまゝ實
ヨ大出來

尾上幸蔵
中嶋座の開ケ者尾上幸藏ハ
古人梅幸の弟子ゟ〻しゞ梅
幸死去の後當時の菊五郎ゞ
まゞ家橘ト呼ゟ頃梅幸より
頼れ申受さる弟子ゟり
寺嶋氏の引立ニテ今
中嶋座の花形役者ゟ
り　イヨ　音羽屋サン

市川市十郎

市川市十郎ハ西京出生ニテ古人市川海老十郎の弟子なり幼年頃不都合ありて濱芝居落さり仝氏ハ今一度大芝居の役者とならんとき志願ありて其際事故ありて山口縣の有名なる人の引立ニテ尾上民藏の弟子となり大阪役者の列ニ入先師匠の恩をとれば今市十郎と云 イヨ浪花屋サン

市川九藏

市川九藏ハ東京出生ヨテ先祖市川團藏ハ四代目市川團十郎の弟子ヨテ代々家名を三河屋ト云親團藏ハ特實の人ヨテ六十三歳ヨテ死去ちさり今四代目九藏ハ幼年の頃ハ茂々太郎ト云實悪を兼さる親玉ちり イヨ 三好屋サン

市川右團次

市川右團次ハ大阪出生ニテ道頓堀の藝妓藤枝の悴ナルモ其父ハ古市川小團次の實子ナリ幼年福太郎ト云文久年間江戸ヘ下リ猿若町三丁目守田座ニ於テ古七代目海老藏のまくめゐ寄り天ケ崎の十次郎貨店の於染人形振ニテ大當り方今大阪の立役者ナリ

イヨ　高嶋屋の大君

中村仲藏

古人中村仲藏ハ東京の出生ニテ古中村歌右衛門の弟子ニテ幼名鶴助と云中年ニテ鶴藏と改相中の頭取名代下ナリシモ何役ヨリても其實細を見せる事又不思議と云べき既ニ仝人の弟子今の勘五郎ゟ渡守甚兵衛の役ニテ師匠仲藏ヨ其役の仕方をたづね者ヨ仲藏答て何も六ツケ敷事ゝし自分ゟ甚兵衛ヨおれゞ夫て宜敷と答ゑハ實ヨ感せし事ともあり明治十九年三月十二日死去せ老年七十八歳

市川左團次

市川左團次ハ大阪出生ニテ同地ニテ名人市川小團次の弟子
とゝり若年より東京ゑ來り古人師匠の引立を忘れぎ
小團次死去の後師匠の妻ナル老母を
引取厚く養育いたし全人病
氣の際ハ我手ゑうんで
を手厚くして親身も及
ばぬ事どもあり今の小團
次の兄分實悪世話事の名人ナリ
家名モ其儘高嶋屋サン

嵐璃寛

嵐璃寛ハ大阪出生ニテ
實親古人璃寛の實子ニ
テ幼年の頃父同道ニ
テ東京ヘ下り嵐和
三郎實父死去の後
璃寛の跡相續シテ
今阪府の大立者實
役をやまを兼ル聞ヶ者
イヨ　羽村屋サン

市川家ハ代々東京
出生ニテ先祖ハ筋目
たゞしき能役者ナリ
古ハ代目ハ親孝心
聞(ありしも大阪ニテ不
慮の死をとげ今九
代目堀越氏ハ又特
別の人ニシテ幼年頃
河原崎座元ヘ養子
ニ行シモ實家の相
續無ク故今市川
家ヘ歸續シテ九代
目團十郎ヨ改メ教
道職の位ニテ俳優
社會の一人ナリ

中村福助ハ東京出生ニテ維新前金吹町金銀座ト云ヘル此金座の役人ニテ土方某ニ男ニシテ幼名子太郎ト云四歳ニテ中村芝翫の養子トナリさそゞハ於美津女のもしこみざけ萬事ろちゞで人柄で今ゞ名代の人氣取寫眞錦繪とりしくも大立者ゴ成駒屋の若旦那とほめて居外イヨ新駒屋サン

中村福助

十二

告人 高橋一夢編輯

俳優 あの世の道行 戀花堂主人柳月校閲

二途の河端 河原崎國太郎

助高屋高助

二人物語の場 坂東彦三郎

程遠さ冥府の旅の一里塚亡者を松の片蔭ゴ寄り群りたる六道の辻籠擔ぐ鬼どもが尊語の高調子「コレ青ゴ今

中村福助ハ東京出生ニ維新前金吹町金銀座ト云あり此金座の役人ニテ土方某三男ニテ幼名子太郎ト云四歳ニ中村芝翫の養子トナリさまざまの於美津女のまじこみざけ萬事ろちがで人柄で今ゞ名代の人氣取寫眞錦繪とりしくも大立者ゴ成駒屋の若旦那とほめて居外イヨ新駒屋サン

中村福助

古人俳優

あの世の道行

高橋一夢編輯
戀花堂主人柳月校閲

三途の河端　河原崎國太郎
三人物語の場　助高屋高助
坂東彦三郎

程遠き冥府の旅の一里塚亡者を松の片蔭ゴ寄り群りた
る六道の辻籠擔ぐ鬼どもが尊語の高調子「コレ青ゴ今

度婆婆から此六日果敢なく死んざ河原崎國太郎が冥府へ来るといふが日頃人は難儀を救ひ善根を施た功德があるゆへ極樂へ遣らねばならぬけれど何んとか無理ゝ地獄へ伴れ行き一ヤ芝居演せたく六日の朝から雁張て居るが何んぼ足弱の女形でもモウ見へそふな者でいるいのト云ふゝ傍から青鬼が「是れから先きい道も多ひが六道までい一筋道是非とも来るゝ違ひない下地が惡婆や盜賊を好きでもる太夫でも地獄ばかりい氣がある

きい「そりや青が云ふ通りで素手でい行くまいから成を掛けて伴れて行のふト鳶色鬼がいふをも俟たず「そきゆへ先刻此黑鬼が午頭や馬頭を河端までい籠を持たして遣て置た大方彼等が足をつけ脅迫かけて伴れて来よふト言ひつゝ向ふを打ち見やり噂をすきば影とやら向ふへ来るい慥ゐ午頭馬頭「大方籠の其中い噂ゝ聞いた國太郎ゐ違むない茲へ来たから大勢で威を掛けて無理無体なんでも地獄へ隨き様ぬからぬ様ふト赤鬼が言

ふ皆々合点ト大焼熱の焚火よあたり待つ間程おく午頭馬頭が車ふ伺らぬ畧籠息せきゆ擔ぎ来て六道れ辻と記へしたる大石塔の傍ゑおろし「ハイ御約束の六道の辻て御座りまはト籠の垂れを打ち上れば中ハ名ゑ負ふ新二者御贔負あつき河原崎國太郎定めて紫雲の紫帽子ゑ白蓮花の振袖と思ひの外の若衆髷伺ざし野ゑ生ふ草色のきつけふ井の字れ紋所ハまつごの水ふ由縁あるたれと白井の權ハてたち是ゑぞ迷の雲助を威さん爲の裝ある

か國太郎ハ二人ふ打ち向ひ「スリヤ此所が六道の辻とやら申ハ所よなト言ひつゝ籠より立ち出れば午頭馬頭ハおぢ〳〵と「どふぞ酒手を下さりませト小腰屈めてねだるふぞ國太郎ハまるりで仕立たるづゞ嚢より金取り出し「賽の河原れ河端より六どう錢で極めたゑど是れハ酒手ゑ遣すト紙ゑ捻つて差出せば手ゑ取つてぶつちやう面「モシ酒手ゑいよハこれ計りかエ「ナニそれでハ不足だゑいやるのか「知れた事だ當時姿婆の女形

○

で一といつて二の形い二丁目のたておやま河原崎國太郎の酒手おら貴て五圓を出し形せへ地獄で蠟ひお經文の一貫二貫の目腐錢なんお是れがあるもれだと傍若無人ゴ投付られ勃とゐせしが一人旅道れる丈ゐ出をこらへ「そりや國太郎なら酒手も多分ゴ出そふけきど身ゐ元や白井權八ト言ひ掛るを打ち消して「アゝコレ〳〵其化の皮は今しがた讀賣のこ者が来て置て行つた此さげうりト虎ゴ皮の煙草入ゴより河原版の繪を出し「たとへ權七であらふが權八であらふが國太郎が死んごといふ事ゐ地獄までも隠きゐないい「ゑらを切るなら淨玻璃の鏡に照けて顯ゐそふかト午頭馬頭二人おいひ立てられ素より無口な國太郎ゆへいひ解とあ形らざれば「シテ其方達が酒手と云ふゐ幾許取らふといやるのゴやト弱みの言ゴ附け上り「幾許かくらや高ゐおい身ぐるみ脱で置て行けと以前の鬼も共々お濁聲張つて言ひけるお國太郎ゐ驚き「扨ゐ婆婆ゴて導ゴ聞さし三途の川の

○

だつゑばよおト身構へなせば赤鬼が「オヽ其だつゑば
の仲間中二者を剝ぎ取る呵責の鬼だいト聞いて國太郎
い負ぬ江戸氣ヨ「老少不定嫌ひく死んでゆきヽの此六
道後生が善くて極樂へ行くを妨げおをおらば攝生おが
ら生けてい置ぬト刀の柄へ手を掛くれば鷲色鬼がおや
〳〵り出で後生が善くば通しもおよふが罪があるゆへ
通さぬ「スリヤ又おんれ罪科あつて「罪い婆婆よて
ハ重桐が臺調のをふだが是きまでお生嬢遊女姦人後家

尼人れ女房ヨまで國太郎の情人ヨおりたいと叫てぬ思
ひをさせたのが其身ふ掛かる大切ひ罪「さては夫きゆ
へ此身をば「地獄へ隋を覺悟おせ「小癪ひ事をト狂言
氣取りで寄らば切らんず勢ヨ「ソレ引ツ擔げト赤鬼が
差圖ふ心得立ちかゝる夥多の鬼を敵手ふおしかおがひ
計りの刀を抜き滅多無生ヨ切り立つれば鬼い真劍ど心
得て左右おく傍へい寄り附かず遥離れて打ち合ふい鬼
も命が惜しきと見へたり斯かる所へ大地獄駿河屋とい

たつゑばよおト身構へゐせば赤鬼が「オヽ其だつゑば
の仲間中亡者を剝ぎ取る呵責の鬼だいト聞いて國太郎
い負ぬ江戸氣ゑ「老少不定嬶邪く死んでゆきゝの此六
道後生が善くて極樂へ行くを妨げおそゐらば攝生おが
ら生けてい置ぬト刀の柄へ手を掛くれば鷲色鬼がおゞ
〳〵り出で後生が善くば通しもおよふが罪があるゆへ
通さぬ「スリヤ又おんれ罪科あつて「罪い婆婆よて
へ重桐が臺調のをふだが足きまでお生娘遊女妾人後家

尼人れ女房ゑまで國太郎の情人ゑおりたいと叫ぶぬ思
ひをさせたのが其身ゑ掛かる大死邪罪「さては夫ゑゆ
へ此身をば「地獄へ隋を覺悟おせ「小癪邪事をト狂言
氣取りで寄らば切らんず勢ゑ「ソレ引ツ擔げト赤鬼が
差圖ゑ心得立ちかゝる夥多の鬼を敵手ゑおしかながひ
計りの刀を抜き滅多無生ゑ切り立つれば鬼い眞劍と心
得て左右おく傍へい寄り附かず遥離れて打ち合ふい鬼
も命が惜しきと見へたり斯かる所へ大地獄駿河屋とい

ふ打提を捧端ゟ下げ擔ぎ来る醫籠の雲助鬼刀を見るゟ
り驚愕なて「ヤレ鬼殺しと籠を捨て雲霞と逃去りけり
此方の鬼も狂言の立ち廻りとは知らぬゆへ國太郎を敵
と思ひてか「叶はぬ宿せト一同ゟ逃げ行く跡見送りて
國太郎はホツと一息つく折から置ノ垂れを打ち上げて
中より窺ふ其人は先きふ未来へ旅立ちー坂東彦三郎ハ
ツ竹つ形ぎの半合羽ちやうど亡者ゟ相應し紀白ゟ脚絆
の旅装束彼の幡隨の長兵衛ゟ騒騒たる扮粧ゟり國太郎

も暗紀冥府ゆへ刀の鞘と探ゟ途端ゟ無常の風さつとか
とーて打提れ明は消えて真の闇主は誰とも知らざれど
籠れ中より坂彦が「お若いれ待つたやるまセト聲掛け
られて立ち止まり「待てと御止めなさまーは手前が事
で御座るかな「如何ゟも左様西方浄土の御佛へ多く出
入は私が商買を口托ゟりやうは遊山半分東門から
花ふる里ゟ思はぬ暇入どうて泊は三途の川と賽の河原
の川端より死出れ山まて戻り籠通りかゝつた六道ゟお

若い方のお手のうち餘り美事を感心いたし思はず見惚
まして居りましたト一腰下げて籠より立ち出で「お氣遣
お者では御座りませぬマアお刀をお收めなさまませト
云ふと國太郎も打ち点頭「拳も鈍ぶき立ち廻れ愧か
しう存じますト卑下の言に會釋おし「最前から籠れ中
で見受けまをまむ貴君とは未だおうずりもなさりませ
ず御ぜんはつで御座りまをが何所から何所へ御通りお
さまをるナ「御親切おるる其御言御覽の通り私は勝手
存ぜぬ西方へ命をくれて六道ふ一人旅とか侮つて地獄
の底へ隋さんと無禮過言の午頭馬頭共命を取るも攝生
と後生を思へど付け上り據所なく恁の仕合せわしも死
ぬずば擊れまいと益おい事を致して御座る「ハテ大丈
夫敵手の鬼は大勢ふ貴君様とは只お一人シテ冥府へは
何御用あつて「別と用事も御座らねど無常の風ふ誘は
れて息が絶えれば致方おふ冥府は繁華と承はり佛菩薩
とならんと思ひ後生の望と思ひぬ旅去るべ便りもおき

身ゆへ何とぞお世話下さらば忝なふ存じまする「作身の上を一通り承はつて作尤も佛菩薩が作望みから西方浄土へ口入なー私が作世話をませうから御氣遣ひなされまをるな「流石は婆婆氣の其お言力と頼む貴君の戒名聞かぬ其をきさま名乗る此身の戒名は至忌院貞性日寶信士と申をもの「スリヤお若衆様ふは日寶信士と作仰まはるか「シテそもとの作戒名は「問はまて何れの其しと名乗る様な佛でも作座りませぬ…だか今では極

楽て身は住み馴ー黒漆の衣は着ねど蓮池の婆婆で尊の花の上即ち私が戒名は板善院東徳日法信士又役名は幡隨の長兵衛と云ふ小お佛で作座りまを「スリヤ婆婆お でも名の聞えー「アイヤ其幡隨は黄泉の和泉町の私が親方株どうして〳〵私はまだ冥府へ来たも昨日今日馴漆も薄い新佛蓮花の端まも居られぬ身が作最負方の作供養を死んだ折から湯棺まま浴び一本花ふ線香の絶えぬ煙ふ極楽で佛たちふも烟ツたがられ肩身を廣く蓮花の

住居こそと云ふにも婆婆からの手向の水の水道を飲む
作蔭ふい氣が強く弱ひ亡者は避けて通し強ひ鬼おら向
ふづら假令閻魔が畜生道の鬼赤毛ゐ乗つて来よふとも
駭ともせるのどや作ぜへまはせぬ及ばずおがら菩薩の端
くれ仇しがらはれ孝を捨て啼く鶯の經を讀み我腹一人
の弟子の彦十郎が年頃の追善や又兄方分の寺島が手向
けれ供養ゴ菩薩と尊られる菩薩の中の菩薩一体いつて
も尋ねて作出ませ蓮花座をへて待て居りゐを「身ゴ餘

りたる其お言仰ゴ隨ひ極樂へ「サテ作一所ゴ參りませ
うト兩人均しく立ち上る折しも迷れ雲晴きて真如の月
ゴ顔見合せ坂彦は驚愕おし「ヤお前い河原崎の太夫じ
やないか「そふ言ひなさんすい彦三郎様まおとゐ婆婆
以来「思ひ掛けないドウーて此所へト問いれて國太郎
は涙呑み「話も夢の様なれど冨士の嶺ゴ置く白雪も
消ゆる六月六日無常の風に是非なくも芝居の終を待た
ずして遂に此身の千秋樂はかない私が身の上を推量し

住居こそと云ふれも婆婆からの手向の水の水道を飲む
俗陰ふい氣が強く弱ひ亡者は避けて通し強ひ鬼おら向
ふづら假令閻魔が畜生道の鬼赤毛ゐ乗つて来よふとも
駄ともるのどやゆぜへまはせぬ及ばずおがら菩薩の端
くれ仇しがらはれ孝を捨て啼く鶯の經を讀み我腹一人
の弟子の彦十郎が年頃の追善や又兄方分の寺島が手向
けれ供養ゑ菩薩と尊られる菩薩の中の菩薩一体いつで
も尋ねて俗出ませ蓮花座をへて待て居りはを「身ゑ餘

りたる其お言仰ゑ隨ひ極樂へ「サア俗一所ゑ參りませ
うト兩人均しく立ち上る折しも迷れ雲晴ゑて真如の月
ゑ顔見合せ坂彦は驚愕おし「ヤお前い河原崎の太夫じ
やないか「そふ言ひなさんすい彦三郎様まおとゐ婆婆
以来「思ひ掛けないドウーて此所へト問れて國太郎
は涙吐み「話をも夢の様なれど冨士の嶺ゑ置く白雪も
消ゆる六月六日無常の風に是非なくも芝居の終ゑ待た
ずして遂に此身の千秋樂はかない私が身の上を推量し

て下さんせトいふ丶此方も目をあばたゝき「最前寡れ
河原丶てチラリと尊丶聞いたまど死んだと云つて賣歩
行く追善の句も間々あるゆへヨモヤと思つたお前ゐ逢
ひ歎きの中で私が喜び冥府へ来ても年頃お女形が誰も
ゐく半四郎さんや田ル助さんは氣がつまつて何丶も出
来ず致方をしゐ何座へも出ずドウソおきから蓮華座へ
一座をして貰ひたいト頼み丶國太郎も泣目を拭ひ「ホ
ン丶私もれ前丶別れ婆婆で色氣の相手がなく我童さん

や權ちやんでゝ姉のよふで釣合惡くドウゾお前とモウ
一度五代力がおたいもおと思つた念が届むてか此所で
逢ふたは私も喜び「お前もそふいふ心から是きから二
人一座をして演したいもおは死出の山程あれば段々と
見せませうイヤ何をいふ丶も此所ゐ往来委しい事は極
樂で「婆婆と冥府の話の數々「いふたり「聞たり「去
ませうト行かんとおせし兩人の後ろゐ窺ふ青鬼が國太
郎ゐ違らぬト組付くを振りほどいて真の當身彦三見る

より「あつばれ手の内」「親方さん」「太夫」「ゆるりと淨土で」「國太坂彦は鬼を投げ除け」「逢ませうといふ折真如の月は隱る闇々たる冥府の闇」「二人が姿は見えずなりけり（此所ら婆婆の芝居なら幕といふ所あるべし）」

夫れより國太郎坂彦と三途の河の旅籠屋へ宿りて終夜婆婆と冥府の話に盡さず仇しの鴉れ啼く頃やうゝゝ眠に付きぬ此所ゐまた閻魔大王は死司の婆々と相談して新入の亡者を買込み一と芝居興行して大金を儲

けんを思ふ所へ婆々に来ありて時に大王さん今度婆婆から無常の風ゐ誘はれて来た河原崎國太郎が昨日三途の川端で駕に籠へ乗り込んだが國太郎をお前が手ゐ附けて私に今年の二月六日ゐ下つて来た高助（有明院訥譽高賀居士）を手に入れ一と芝居興行たら金の儲かるに必定なり狂言作者の竹芝錦正もつひ此間下り来つ長唄師ゐに芳村伊三郎も居合にせ皆揃ひたる大一坐ト相談こゝゐ整むけれむ善に急げと早々に鬼を極樂へ遣は

より「あつぱれ手の内」「親方さん」「太夫」「ゆるりと淨土でト國太坂彦は鬼を投げ除け「逢ませうトいふ折真如の月は隱さ闇々たる冥府の闇ゝ二人が姿は見えずなりけり（此所らが婆婆の芝居ちら幕といふ所あるべし）夫れより國太郎坂彦と三途の河の旅籠屋へ宿りて終夜婆婆と冥府の話ゝ盡さず仇しの鵜れ啼く頃やう〳〵ふて眠ゝ付きぬ此所ゝまた閻魔大王は死司の婆々ゝ相談ゝて新入の亡者を買込み一と芝居興行ゝて大金を儲

けんを思ふ所へ婆々ゝ来あり て時ゝ大王さん今度婆婆から無常の風ゝ誘はれて来た河原崎國太郎が昨日三途の川端で駕ゝ籠へ乗り込んだが國太郎をお前が手ゝ附けて私ゝ今年の二月六日ゝ下つて来た高助（有明院訥譽高賀居士）を手ゝ入れ一と芝居興行たら金の儲かるゝ必定なり狂言作者の竹芝錦正もつひ此間下り来つ長唄師ゝ芳村伊三郎も居合ゝせ背揃ひたる大一坐ト相談こゝ整むけれど善ゝ急げと早々ゝ鬼を極樂へ遣は

して呼び寄せたるは坂東彦三郎助高屋高助河原崎國太郎の一坐にて外に相中作者長唄連一同皆な乗り込み来たりしかば極樂地獄れ合の宿此度開けた年回町に新築落成し蓮花坐に六字の彌陀が太夫元となり當る初七日開場にて四十九日の其間興行おすとれ掛札に待ち無ねいたる亡者たち佛元鬼元侶供ふ見物せでやあるべきと土間桟敷も賣切ていと景氣よく見えありける抑も其外題は鞘當にて役割は左の如し

鞘當（伴左衛門、三五兵衛）

（三左、源五兵衛）　坂東彦三郎

（茶屋の女主お勝、藝者小万）　河原崎國太郎　助高屋高助

程なく舞臺は木がらいにて紫色にて雲れ染め抜きの幕西へ引明くるに向ふは極樂東門口遠見に浄土の仲の町雲や見まがふ櫻の花に茶屋廻りの鬼に鉄棒一じゆん廻りて詠への唄は芳村伊三郎三味線は杵屋勝五郎にて

「花のふる彌陀の作國のありさまは金殿玉樓かゞやく

て緑の林たかられ池異香のかほりぞかんばーき
ト東西蓮の花道より坂彦ハ雲ヨ電光高助ハ雨ヲ燕婆婆
と同じ羽織衣装對の編笠六法ヨてゆりかけ〳〵出で来
たり双方一時ヲ立ち止まりて　彦「遠からんこ者ハ地獄
の釜のおとにも聞け近くハ寄つて目ヨもあみだの等活
でたち今りやうこうの電光組迷ひ廓の東門を這入れば
忽ち極楽浄土こくうヲ蓮花まひわこり　高「かぶの菩薩
の君こちが妙なる作聲音樂ハ誠ヨ天女のまくだり花ヲ

りかゝる黄金城光り輝く其中へ午頭馬頭組か雷れ　彦「
とれを知らずや雷光の果敢なく消ゆる不時の死去施主
ヨせかれて編笠を冠る涙の雨ヲ鳥　高「濡る心の傘ヨ本
の雫や末の露ぬれヲぞ濡れし袖袂　彦「ゑこうする日ハ
梦の夜の四十九日も手向けの水　高「三途や死出の山桂
彦「西ヨ極楽　高「北ヨは地獄　彦高「思ひ競ん白小袖
「二百一十おくまんの諸佛菩薩の浄土ヨハ功徳くらべ
や慈悲くらべ法の街の結願ハ難有かりける次第なる

ト兩人かぶの舞臺へ来あり紋切形は鞘當かし坂彦は高助の刀の鐺を捕ゆきば　高「刀の鐺を捕へし仕方こりゃあんとめさるゝ　彦「おきゃこなへ仕免れ身は此里へ迷ひ来て當世たゝら大盡と人も知つたる冥府の闇極樂計り月夜かな特は七寶まむゆくも照りかゞやきしじやうくまう淨土の往還を避ずして武士の鞘當挨拶そへ　高「そりゃ此方より申す事六道廣き冥府道わがもの顔の六ほうは假令男のそおもとは　彦「賽の川原ゐ隱を形さ

妻は形さ身ゐが死大將その名も高き針の山心ゐ違へば剣の電光　高「其模樣をは事變り雨の降る夜も風は夜も叩きつめたるふせ鉦は夜の勤は絶えずして無法無間の行違ひ避て通をも法の道　彦「其所を其儘通さぬが電光組の亡者の意地づく　高「電光組の其中ゐ坂東一とおいやれど實は板善院東徳日法信士包むとをれど物ごゝ合恰　彦「其聲音こそ覺えある昔の人は袖の香と名は鑢菊と見抜て置たい　高「面を包む其編笠　彦「脱て貴殿の御

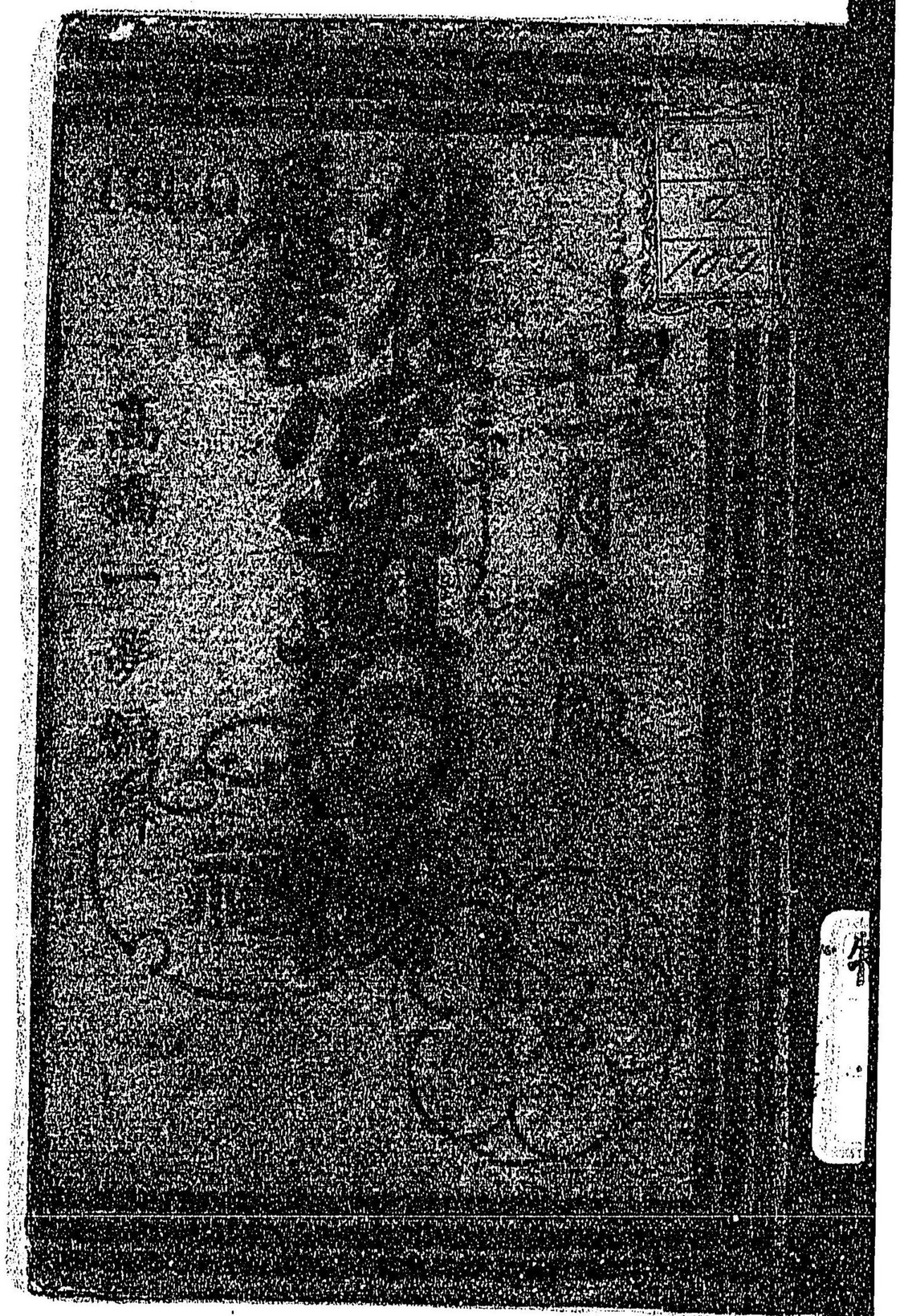
面像　高　彦「先づ其笠をト送る笠へ手を掛けて顔見合せ
彦「思ふる違はぬ高賀居士　高「日法信士　彦「絶えて久し
き對面も　高「場所も多きる冥府なる　彦「蓮の盛りの花
の頃　高「果敢なく此所で　彦　高「逢ひはしたるアト兩人
きつとみへあつて　彦「久しぶりなる貴殿へチト折入つ
て頼がある　高「ナ　二某へ頼とは　彦「今度婆婆から撞出
しの日寶信士太夫が貰ひたい　高「如何ゝる貴殿へ進上
と申しあけまど彼の國どい辨だるより久しひ馴染おの

事計りにはかまをならぬ　彦「ならぬとあれば黒闇の雲ふ
電光劍の山　高「身ふりかゝる八寒の雪氷ゝ濡れ襟
彦「あびきやうくわんや　高「ゑやうねつの　彦　高「火花を
散らしてトかぶの雛の鳴り物ふ修羅ヒ街の立ち廻り最
と目覺しき其所へ婆婆下りの國太郎茶屋娘の裝束まて
客を送り火の打提を手ふさげて出で来り此体を見るゝ
りも二人が中へ割て入るあり合ふ將几の毛氈を白刃へ
掛けて疵とれ要へ　くゝ「マアく待て下さんせトいふ

ふ兩人うちみやり　彦「いらぬ女の支ざて　高「けがせぬ
中ま　彦高「のいたゝ　くゝ「イヽエのかれぬた二人さん
の真剣づくの此であひ私も常の亡者おらすゝおいおん
ぞといろめゝし見て見ぬ振が佛の情それがならぬが持
前の人の世話好死厄介好き婆婆ふも懲ず又冥府で佛だ
てらとお叱りも三をぢま葛藤たる此場を丸く鑛菊の水
ふ流して是きからは蓮花の一坐まなり渡りたる音羽屋
さん名も高助さんの性二人ぞも中睦まじふおく山の竹
田が作の人形と同じ様ふ此場をば清く預けて下さんを
が死出の山崎手向けの花は形を持して下さんせいふト
けふお目見えの國太郎の出ふ佛菩薩はいふも更なり多
辺の亡者見物ハイヨ山崎屋ト賞むる聲實ふ山も崩るゝ
計を押合へし合どよめくふぞ留場の鬼ども角を振り立
て制しゝれども日常と違ひ亡者ハ一向聞いれず既まを三
人まで目を廻しし甦りしものありしぞか免角ふするうち
狂言は早當鞘の幕際ゆへ先づ今日は是きを切りと修羅れ

太鼓のうちだしゝ導たらく見物はむつの街の六道へ
別れ〳〵ゝ歸りけりさても其後四十九日の大入は地獄
ゝ稀れなる大入ゝて金主も喜び勇をければ坂彦高助國
太郎等ゝ閻魔の面の塩辛からで常にゝあらぬ笑ひ顔見
るゝいたく喜びて西方淨土へおもむきけりト見ゝゝ是
を夢ん一梦居士が贔負のあまり思ひ寢の枕ゝ結ぶ夢ゝ
して覺ゝ丁度東も白らみあけの烏の啼く頃ゝぞあるぬ
何の世の道行終り

明治廿年十月六日御届
同年十一月十五日出版　定價金七錢
編輯兼出版人　神田平永町十八番地　東京府平民　高橋傳吉
費　日本橋區通二丁目　綱島亀吉
同　横山町二丁目　辻岡文助
同　馬喰町二丁目　山口藤兵衛
同　本石町二丁目　上田屋榮三郎
捌人



074817-000-8

特64-98

古人俳優あの世の道行

高橋　伝吉／編

M20

CEK-0154